

理論研究科目「学習環境デザイン論」

舘岡 洋子

要 旨

理論研究科目のひとつである「学習環境デザイン論」は今学期、オンラインで実施することとなった。学び合いを重視する授業として、履修者たちが互いに意見を述べたり考えたりするための対話の場をもつことはオンライン授業でも可能なのか、試行錯誤したのがこの学期であった。そこで、実践者として今学期の授業を振り返り、検討した。

その結果、対面授業と異なるオンライン授業の特徴として、授業（オン）と授業外（オフ）が分断されること、コミュニケーションが単線化しがちなことをあげ、それを乗り越えるために「間」を作ったり、コミュニケーションを複層化したりすることが必要であることを述べた。

キーワード

対話 学習コミュニティ 同期型オンライン授業 反転授業 Waseda moodle

1. はじめに

学習環境デザイン論は日本語教育研究科設置の理論研究科目のひとつである。2019年度まで行っていた「学習環境デザイン」という理論科目を引き継ぎつつ研究科のカリキュラム改訂の中で2020年度からは「学習環境デザイン論」として再出発した。学習や教育、また学習コミュニティ、対話の場づくり、教師の役割などのテーマを扱っている。2020年度春学期は対面授業ができなくなり、受講者同士の話し合いを重視した授業をオンライン上でどのように実現できるかということへの挑戦となった。

2. 通常時のシラバスや授業運営

2020年度春学期のシラバスに掲載された内容は以下のとおりである。

学習を個人的なものではなく社会的文脈で起きるものと捉えたとき、学習者が何を媒体として学習コミュニティを生成していくかを理論的に考えるための科目です。

この講義では、第二言語（外国語）としての日本語を学ぶことと教えることについて、学習環境とそのデザインという観点から考えます。認知科学、学習科学、教育学、心理学などにおける論考を参考にしながら、学習環境としての「日本語の教室」や「ことばの学びの場」についてさまざまな角度から検討します。予定している内容

は大きく2部構成からなります。

第1部は、ことばの学習をテーマとしています。学習の問い直し、言語教育と学習観、学習観の変遷、学習を促すリソース、学習者オートノミーなどについて考えます。

第2部では、それまで学んだことを踏まえて教室活動、学びの場のデザイン、実践研究、日本語教師の専門性などについて考えます。

授業は講義部分とワークショップ部分からなり、履修者どうしの学び合いをとおして、ことばの学習とは何か、教室とは何をするとところなのか、ことばの学びの場づくりとはどういうことで教師の役割は何か、などについて考えていく予定です。大枠は上記のとおりですが、毎学期、履修者の希望を聞きながらテーマを設定します。

【到達目標】授業をとおして、自分自身の教育観・学習観を明確化することができるようになること。

【レポート】レポートはクラスメンバーに公開とし、ディスカッションによって内容を相互に検討します。

実際には上記の目標や授業内容をほぼ変えずに、オンラインでこれらを実現することとなった。

3. 授業前に行った準備

本授業は最初からオンラインで行うことが想定されていたわけではない。オンライン化するにあたりめざしたことは、第1に対話を重視し学習コミュニティが形成できるような授業デザインをすること、第2にオンライン化にあたっては教員である自分のスキルも考えた上で無理をしないこと、第3にいくつかのツールや手段を組み合わせることで複層的なコミュニケーションの場をつくることである。そこで、具体的には以下のように準備した。

3.1 対話を重視したデザイン

本授業では扱うテーマについて履修者たちが互いに意見を述べたり考えたりするための対話の場をもつことを最も重視した。そこで、反転授業のスタイルで進めることにした。

具体的には、授業前に知識や情報を得てディスカッション・ポイントを整理し、それを共有した上で授業の中ではなるべく対話の時間をもつこと、また授業後には振り返りの時間を持ち互いに文字による対話の機会をもつことである。

授業（90分のリアルタイム・セッション）はZoomを使用して教員からの講義や全員であるいはグループでディスカッションを行うこととした。授業の流れは回によって多少異なるが、およそ図1のとおりである。図1の上の流れは履修した学生の活動の流れ、下は教員の流れである。

〈リアルタイム・セッション前：各自、任意の時間に行う〉

- ① 【教員】 その日のテーマにふさわしい論文をテキストとして指定し、Moodle上にアップロードする。
- ② 【履修者】 指定のテキストを読む。
- ③ 【履修者】 議論したいポイントをMoodleのフォーラムに各自アップロードする。
- ④ 【教員】 履修者全員の論点をPPTにまとめ、前日までに履修者のメーリングリストに送る。

〈リアルタイム・セッション：Zoomを利用して行う〉

- ⑤ 【教員】 その日のテーマについて講義を行う。
- ⑥ 【履修者・教員】 Zoomのブレイクアウトセッションで3～4人のグループになり、④で送られてきたPPTを「画面共有」の機能を使って共有しながら、ディスカッションを行う。このとき必要に応じてグループの話し合いをPPTに記録する。教員は各グループをまわる。
- ⑦ 【履修者・教員】 ⑥の話し合いを全員で共有する。この時にグループで作成したPPTを使用する。

〈リアルタイム・セッション後：各自、翌週までの任意の時間に行う〉

- ⑧ 【履修者】 他者との対話などをおして気づいたことや新たなアイデアを振り返りとしてまとめ、Moodleのフォーラムにアップロードする。
- ⑨ 【履修者】 互いの振り返りを読み、コメントをする。
- ⑩ 【教員】 履修者の振り返りを読み、コメントをする。⑨と⑩は順不同。

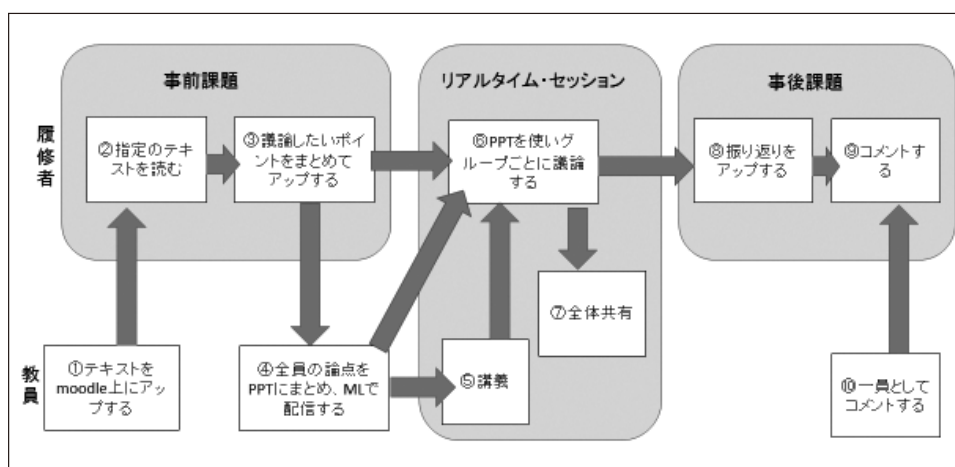


図1 授業の流れ

3.2 無理をしないことと複層的なコミュニケーションの場を作ること

今学期は期せずしておきたオンライン化である。また、2020年度から早稲田大学は新たなLMSとしてWaseda moodleを導入した。したがって、まずは自分自身が使える範囲のツールを使うことを検討した。

そこで、①事前課題として論点整理をしておいたり、事後課題として振り返りを書いたり、また、互いの意見にコメントを記入したりするために、Moodleを使用することとした。②連絡用にメーリングリストを作った。これは授業用の連絡のほかに学生からのその日のテーマに関する情報提供にも使われた。③リアルタイム・セッションはZoomで行うことにした。グループでのディスカッションが容易に行われるからである。

このようにしていくつかの異なった、操作可能なツールを組み合わせることで複層的なコミュニケーションの場を作ろうと準備した。また、事前にZoomによる授業説明会も実施した。

4. 授業が始まってから起きたこと

3に述べたような準備を進め授業に臨んだが、途中から予定になかったことも行うようになったので、以下に報告する。

4.1 90分のリアルタイム・セッション

授業開始前に「事前課題+リアルタイム・セッション+事後課題」という流れを考えた時には、リアルタイム・セッションを90分するのは長すぎるのではないかと考えていた。前後の課題の負担も考えて、45分～60分程度の時間を想定していたのである。しかし、1回目の授業で実際にやってみると、教員からの講義とその後のグループワークの時間をとると90分でも足りないくらいであった。そこで、履修者たちにも意見を聞き、結果、リアルタイム・セッションは第1回から最終回まで90分となった。

そもそも何のためにZoomという会議室に集まるのか。話し合うべきテーマがあり、それをめぐって対話をする。教員が伝えたいこともあり講義の時間も必要である。履修者に事例報告をしてもらうこともある。結局、毎回、時間はあっという間に過ぎてしまった。コース終了時のアンケートでも、ほとんどの者が90分は必要であり、あっという間であったと回答している。一方向のオンライン授業であれば、90分はかなり苦痛であろう。しかし、グループワークが多い場合、90分は必要であった。

4.2 チェックイン

最近、いろいろなスタイルのワークショップがあるが、ワークショップでは開始時に参加者全員が順番にごく短い時間でそのとき考えていることや気持ちなどを率直に語るチェックインという活動がある。これは、これから場に全員が対等に参加しますよということを意識化する儀式のようなものではないだろうか。全員がまずその時の自分の気持ちを語るところからスタートすることに意味があるのではないかと考える。

オンライン授業はどうしても固くなりがちである。対面では周りの人々の顔を見渡してタイミングをつかんで発話するであろうが、オンラインではそれも難しい。しかし、対話の場づくりのためには、クラスが少しでも学習コミュニティに近づくようになってほしい。そこで考えたのがチェックインであった。第3回目の授業から最後まで、毎週、実施したが、このささやかな活動によって、互いの人となりの一部を知ることができたように思う。

4.3 授業後雑談会

上記のチェックインと同様の目的で、たしか第8回目の授業から、「授業後雑談会」の場を設けた。授業終了時間に教員は履修者の一人にZoomのホストを譲り、退出する。その後、時間のある話したい人たちだけで雑談を行う。もともとは授業の時間内にグループでの作業が終わらず、時間的余裕のある人たちが残って作業をしたのがきっかけであった。

この雑談会の内容の詳細は参加していない筆者にはわからないが、授業とは関係のない話も少なくなかったと聞いている。そもそも対面授業の場合は、授業後に教室に残った人たちが雑談をしたり情報交換をしたりしている。オンラインの授業になったとたん、このような場もなくなってしまった。ホストである教員が退出ボタンを押したとたん、みんなはオンからオフの状態になってしまうのである。教員退出後の雑談会は、そこに「間」をつくり、学習コミュニティの形成にもおそらく貢献したのではないかと考える。

4.4 期末レポート合評会

期末レポートを書き、互いに読んで批評し合う「合評会」は、毎学期行っていることで、オンライン化による新たな試みではない。しかし、オンライン化の中では対面のとき以上に「書いたもの」をもとに互いにコメントをし、省察を促していくことは重要ではないかと考える。合評会でのコメントから見直しをし、レポートを書き直すことでレポートはより充実したものとなる。

5. まとめ

オンライン授業でも対話が生まれ学習コミュニティが形成できるのか。本授業でそれが可能になったかどうかはわからない。しかし、対面では易易とできていたことがオンラインでは難しいことも多い。互いの関係性が構築できるような場をどのようにデザインできるか、それ自体が学習環境デザイン論のテーマでもある。

リアルタイム・セッションではそれなりの議論は展開できたと思うが、授業中（オン）と授業外（オフ）ははっきりと分断されている。「間」がないのである。しかし、「間」でかわされるコミュニケーションこそ関係性構築には大きな意味があるであろう。チェックインや授業後雑談会はオンライン上で「間」を実現する工夫のひとつといえるだろう。

オンとオフの分断については、発信という観点からもいえる。発信者（話し手）は一人で、ほかの人々は聞き手となる。コミュニケーションが単線化しやすく、対面でおきるようないくつものコミュニケーションが複層的に同時に起きることはむずかしい。それを補うには、たとえばZoomでのやりとりであれば、チャットなどほかの手段を補完的に使ったり、Moodleでの書き込みやメーリングリストなど複数のツールを組み合わせたりすることで、いくつもの複層的なラインを作ることができるのではないかと考える。

どのようにしたら「間」を作り、コミュニケーションを複層化することができるのか、さらに考え今後の実践につなげていきたい。

（たておか ようこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科）